

内田魯庵文芸批評の研究 (二)

『夏木立』評管見 — 魯庵・忍月の比較を中心に —

吉 田 有 美 子

・1) に発表したものであるが、ここで鷗外は、
余等は重に一々の詩、殊に小説を評したるものを擧げんと欲し

て先づ二家を得たり

誰ぞや、國民之友に忍月居士あり女學雜誌に不知庵主人あり

と、小説批評の第一人者として忍月、魯庵の名を擧げているのである。

同様の指摘は、明治二十三年二月九日付の「讀賣新聞」にも見られる。「當世批評家三幅對」と題するこの記事で名を掲げられているのは、忍月居士であり、謫天情仙であり、そして不知庵主人なのである。

また「早稻田文學」(明25・5)の「時文評論」の欄に掲載された

明治二十年代前半は、魯庵が「女學雜誌」「國民之友」「國民新聞」等を舞台に、活発に文芸批評を行つた時期である。この期の魯庵の批評活動は、前稿でも触れたとおり、彼の一生涯を通観しても特筆すべき盛況さを呈している。今日では、魯庵のこの期の文芸批評はさほど評価されていないようであるが、当時の文壇における位置はどうであつたのだろうか。

この疑問を解く手がかりの一つとして、「明治二十二年批評家の詩眼」^(金2)が挙げられる。これは鷗外が「志がらみ草紙」第四号(明23

「批評の繁昌」でも、

ここで注意すべきなのは、魯庵の批評が忍月よりも後に出たと、

「詩眼」が挙げられる。これは鷗外が「志からみ草紙」第四号（明治23

「批評の繁昌」でも、

三四年前の時文學界に於ては小説美文等を評する批評家は謫天
情仙、忍月居士、不知庵主人の三家の外には鷗外漁史、蝸牛庵、

正直太夫、思庵外史、逍遙ぐらゐにとゞまりて（以下略）
と述べられ、三家の一人に数えられているのである。

これらから考えあわせると、明治二十年前半―少なくとも二十一
年―三年に於て、魯庵は忍月と肩を並べる文芸批評家であり、批評
壇に覇をとなえる存在であったと思われる。

そこで、魯庵と、当時並び称されていた忍月との同一作品に対
する批評をとりあげ、その比較を試みることにする。本稿では紙面
の関係上、『夏木立』をめぐる両者の批評のみに留めるが、同時代
に為された魯庵、忍月の文芸批評をつき比べることによって、各々
の文芸意識や批評方法の特徴もいくらか探れるのではないかと思う。
尚、本稿の目的は、今述べたとおり魯庵、忍月の比較であるが、
当時、小説界で名声を博していた紅葉の『夏木立』評も、両者の批
評を考へる上で有効な場合のみ参照することにした。

二

忍月が「国民之友」に「夏木立^(注5)」という標題の批評を発表したの
は、明治二十一年九月七日、魯庵の「山田美妙大人の小説^(注6)」と題す
る評の（其一）が「女學雜誌」に掲載されたのは、その約一カ月後
の十月二十日のことである。

ここで注意すべきなのは、魯庵の批評が忍月よりも後に出たとい
うことの意味である。

魯庵はこの評の中で、
石橋の忍月ぬしが曰はれた通り天が不公平にて大人の脳髓を小
説界の爲めに造られたるものなるが（以下略）
と書いている。これは、忍月が『夏木立』評の中で、
知る可し著者の眼、著者の脳髓は天特に小説界の爲めに作出し
たることを。
と述べた部分をふまえた上での発言であろう。

この一点から見ても、『夏木立』を批評する以前に、魯庵が忍月
の批評を通読していたことは明らかである。こう考えると忍月の評
の一月後に魯庵の評が出たということは単なる時間の隔たりでは
なくなつて来る。というのは、魯庵が忍月の批評を念頭に置いて自
らの論を展開していると考えられるからである。

同様のことは紅葉の批評にも言える。紅葉は「我樂多文庫」の七、
八、九号に『夏木立』評を連載したが、最初の批評が発表されたの
は明治二十一年九月十日、忍月の批評が出た直後である。紅葉はこ
の批評の終わりに、

國民の友にて忍月居士が馬あしにあの言葉はいひまハし巧みに
すぎて為永流の藝者のやうだと申されたが（以下略）
と忍月の指摘の一部を引いている。これからも、紅葉が忍月の批評
に目を通していたことは明らかである。

また、二回目の批評の末部では魯庵の『夏木立』評のことに触れ

ている。

筆者注

(二回目の批評を) 書了りし折から本郷不知庵といへる小説界の主護神より社幹思案へ宛たる書狀到着せり内ハ「山田美妙大人に寄す」と題して愉快に夏木立を批判したまへり縦横にまはしたる文章の面白き紙背にぬける慧眼の恐ろしさ(以下略)

ここには、魯庵が『夏木立』評を投稿した際の事情や、その批評に対する紅葉の受けとめ方が示されていて興味深い。紅葉は魯庵の批評に対して「縦横にまはしたる文章の面白き紙背にぬける慧眼の恐ろしさ」と評価する発言を行っている。こうした点から考えて、少なくとも三回目の批評を手がける以前に紅葉が魯庵の批評を読み、その批評内容を肯定的に受けとめていたことは確かである。

魯庵が忍月の批評を、紅葉が忍月、魯庵両者の批評を読了した上で自らの批評を行っているという事情は、各々の批評の上にとどのように影響しているだろうか。批評内容、批評方法の共通点、相違点を考える際には考慮したい点である。

更にもう一点、内容を比較する前に注意しておくべきことがある。それは『夏木立』評を発表した時点での三者の位置の相違である。紅葉は批評家として魯庵、忍月と同等に扱うわけにはいかないであろうから、しばらくおくとして、魯庵、忍月の立場の違いは押えておくべきだろう。

忍月が『夏木立』評を発表したのは、「妹と背鏡」「浮雲」「藪の鷲」を批評した後である。つまり、文芸批評家として華々しく活動し、既にある程度の地位を文壇に得ていた時であった。それに対し

て魯庵の「山田美妙大人の小説」は、彼にとって文字どおりの文壇へのデビューであり、美妙への私信として投稿したという事情もあって、批評家としての自覚も当然のことながら希薄であったと考えられる。従って、この『夏木立』評に関する限り、魯庵はまだ、批評家として忍月と同等の地位を獲得していなかったのである。

だとすると、両者の批評の特徴を比較する上で、『夏木立』評をとりあげるのはあまり適当とは言えないかもしれない。が、『夏木立』評は、魯庵の文芸批評の出発点であり、批評家としての位置を得るに至る地盤とも言える批評であるので、敢えて取りあげることにしたのである。しかし、両者のおかれていた立場の違いは、この評をとり扱う際に留意していい点だと思われる。

では、以上の二点を念頭におきながら内容を見ていくことにする。

三

まず冒頭部分であるが、忍月の批評は次のように始まる。

斬新卓絶の文を縦横自在に運轉し至微不至の精緻を巧妙に描く者を、明治小説の新舞臺に求むれば、予は「いらつめ」の座頭「我樂多文庫」の立役者山田美妙齋氏を以つて其第一人に推さんと欲す。

この最初の一文で、忍月は「いらつめ」の創始者であり、「我樂多文庫」の立役者である美妙の卓絶な文章を誉め、文壇に於ける功績を認める発言をしているのである。

一方、魯庵の批評はどうかと言うと、やはり美妙の言文一致の文

功績から筆を起こしたのに対して、紅葉は『夏木立』の表紙の出来

し、既にある程度の地位を文壇に得ていた時であった。それに対し、

一方、魯庵の批評はどうかと言うと、やはり美妙の言文一致の文章を「一流獨得」と認め、文学界の第一人者として捉えるところから始まっている。つまり、内容的には忍月とはほぼ等しいと言っている。少々長くなるが、その部分を次に引用してみよう。

「いらつめ」創業の功臣硯友社一方の旗頭美妙齋大人に奉る一流獨特の言文一致駢誰かは大人が矢表にたつべき誰かは大人に弓をばひくべき緋威の鎧に龍頭の冑を被り金覆輪の鞍置きたる連錢足毛の馬に跨り握太なる重藤の弓を手にし輝く計りの馬れんを先きにノンノと顯はれたるは天晴なる武者態一の谷に平家の膽を冷せし九郎判官も北莊に鬼柴田を嘆息せしめし猿面冠者も何のものはと狸毛の筆に墨タツプリとふくませて隆々と振たてリツトン、サカレーを馬廻りとなしミルトン、スコツトを謀士となし「ヤアノ」遠からんものはいらつめを讀め近くは寄て筆さきを見よ」と文學界の戰場に鳴渡る計りの御勢「我こそは」と縦横に手くばりせし武者原も色をば失ひ今辯慶の柿山伏も鈴懸ときんをぬぎて降参すあなすまじき御手があらいらいさましき殿御振。

こうして両者の冒頭部分をつき比べてみると、各々の表現の特徴がよくわかる。忍月が四角四面に一文で述べたのに対して、魯庵の方は美妙の活躍ぶりを戯文調で捉えてみせているのである。言っている内容にさほどの差がないにも拘わらず、読後の印象が大いに食い違ふのは、こうした表現のセンスに拠るところが大きいであろう。では、紅葉の批評の冒頭はどうであろうか。魯庵や忍月が美妙の

功績から筆を起こしたのに対して、紅葉は『夏木立』の表紙の出来具合から批評を始めているのである。

まづ表紙の繪から申さうぞ（エ、恟驚した）如何にもぢぢむさくして巻を繕く氣が出ぬ同じ察じるならモツトつツこんで案ず可く、さなくバ矢張り例の金港堂物の表紙かよし
この部分だけを見ても、紅葉の批評が作品の内容には直接関係のない細部をも云々するものであることが窺える。「まづ表紙の繪から」と言っていることから、このような調子で次々と批評が為されていくらしいのは十分に推測できるのである。

このように、冒頭部分には三者の個性が端的に現れている。ここに示された批評態度や表現方法は、冒頭のみに限らず各々の批評全体にあてはまるものである。換言すれば、冒頭部分のあり方は、三篇の批評を象徴しているといつてもよいであろう。

四

魯庵は次に、自分の立場やこの批評を書くに至った動機について冒頭部分と同様の戯文調で述べている。これを見ると、

おのれは大人が旗下にたつ木の葉武者にて有ぞ陣笠胸服の雜兵にて候ぞ數ならねども敵が矢表にたち主君の爲めに忠義を盡すこと本務なれ陣鉦鼓螺貝の音に右へ左へと駈回ること職分なれと言うように、自らを「主君」たる美妙に付き従う「木の葉武者」^(注)だとしているのである。「予が文學者となりし徑路」^(注)の中でも、魯

庵は「山田美妙大人の小説」について、美妙の作品に「感服」し、「此所にも斯う云ふ忠實なる讀者が居るぞと云ふことを示して、その人々に對する聲援を與へたのに過ぎない」と解説しているが、少々オーバーな表現であつてもこの発言は、美妙の文学態度に同調し、その作品を肯定的に見ていた当時の魯庵の立場を示したものであらう。続けて魯庵は言う。

さは云へ胸にわだかまる疑點は凝てもつるゝ勢なれば言はで止みなんよりはと嗚呼がましくも名乗出で勝負々々と大言を吐く事とはなりぬ。

ここで魯庵は、この批評を執筆した動機について述べているのであるが、この批評はあくまでも美妙に期待するが故のものであつて、決して「御大將をあげつらふ」ものではない、という立場を崩していないのである。

このように魯庵は冒頭に続く部分で、自分の立場というものを明らかにしたのであるが、別の部分でも

おのれとてもちとばかり赤表紙の端をかぢりたり縦令めくらの垣のぞきにもせよ「せめては文學界の食客ともなりたし」の心を以て讀みたる事なれば(以下略)

または、

おのれとても文學専門のものにもあらずマツタ古今内外の野乘小説をひもときしものならねば生意氣に小説を論ずべくもあらねど(以下略)

と言うように、自分の位置を示す発言を所々に挟み込んでいるので

ある。

紅葉の場合、美妙は硯友社での同輩であるから、今さら自分の立場を説明する必要はなかつたであらうが、忍月の批評にも魯庵が行つたような立場、位置の表示は全く見られないのである。こうした点に、魯庵の文学熱の強さを見ることもできるが、やはり一介の文学愛好者であつた魯庵と、批評家としての地位を獲得していた忍月との立場の相違を感じずにはいられないのである。

五

続く段落で、魯庵は次のような発言をしている。

言ふ迄もなく大人は小説改良家の一人なり大人は小説改良の理屈を云ひ給はざれど改良小説の實例を擧げられたりここに、魯庵が美妙をどのように捉えていたかが、はっきりと示されている。魯庵は美妙を「小説改良家の一人」としてうけとり、「李白東城が見残した風景ポープ、スコットが寫しかねた人情を遍く網羅し天巧造化を欺き鬼神惡魔を泣かしむる妙語警句を累々と見ること」を期待しているのである。

これに続けて魯庵は、最近の小説界が「我もくくと筆を取り演説句調に洋語漢語をコテ／＼ならべ圓機活法から拔出した様な對句を澤山入れ理屈張つた文章に千篇一律の趣向を書き是が改良小説にて候ぞ是が政治小説にて候ぞと云ふに到」る「雷同の二字跋扈する」改良ブームにあることを指摘している。そして、このように「混亂

と言うように、自分の位置を示す発言を所々に挟み込んでいるので

錯雑」とした文学界であればこそ、真の改良が必要なのである、今やその「小説一新の大機會」が到来しているのだと説く。その上で美妙に対して、

小説改良家の一人として文學界に臨む上は似而非作者と全しく世間の流行に媚ぶべからず一時の喝采をむさぼるべからずと述べるのである。

これは、美妙の作品に「世間の好尚に媚びて其真相を枉ぐる」傾向があるのを看破しての指摘であった。以下魯庵は、「考案」が一夜作りであること、「夏木立」所収の諸作が「小説を編むの材料」である「スケッチ」であって「小説」とは呼びにくいものであること、文章が「唯奇麗だと云ふ計り」の「實のない」ものであることなど、美妙の天稟を発揮したものではないことを説明していくのである。が、その一つ一つの根拠については後で取りあげることにして、まず「小説改良」という視点から魯庵、忍月の批評をみていくことにする。

魯庵は右に述べたとおり、明治二十一年を「小説一新の大機會」と捉え、「小説改良家」として美妙を考えているのであるが、忍月の『夏木立』評には「改良」という文字は一度も現れて来ない。これは魯庵が、『小説神髓』以来叫ばれて来た「小説改良」が未だに真の意味での実を結ばず、「雷同の二字跋扈する」単なるブームに終わっていることを遺憾に思い、新文学の創造としての「改良」の必要性を強く意識していたという、一つの証明であろう。しかし、忍月が、「小説改良」に対して全く無関心であったという裏づけに

改良ブームにあることを指摘している。そして、このように一海爾

は決してならない。^(註)

それよりはむしろ、忍月の『夏木立』評が独立した作品そのものに焦点をあて、忠実に内容を論じているのに対して、魯庵の批評はもっと大きな範圍に目を配っているという点に注目すべきだと思う。魯庵は、「殊におれが最も敬服せしは大人が作次第に進化されたる事なり」などと、『夏木立』以前の作品の変化についても触れているし、先に引用したように文學界の現況も分析している。また古典、泰西小説に関する言及も行っているのである。批評全体の量の差にも当然関わってくるのだが、取りあげている範圍自体が、忍月と魯庵とではかなり違っているのである。

このことは標題にも象徴されている。忍月の批評が「夏木立」と題しているのに対して、魯庵の方は「山田美妙大人の小説」である。その範圍の差が「改良」という事項の取捨選択の一原因になったのではないかと思われる。しかしながら、魯庵の改良意識を追う上で見逃してはならない発言であろう。

六

では、話をもとに戻して、魯庵がどのような点を「世間の好尚に媚びて」美妙の実力が出しきれていないと指摘しているのか、その個々について考えてみたい。

まず一つめの指摘は「考案」についてである。その部分を引用すると次のようである。

大人が靈筆は天資なりとも一夜作りの考案にて秀作の出來べしとも覺えず茄子の一夜漬うましと雖も八百善料理には及ばず大人が筆は常に活動せるが故に讀者一度は眩惑すれども仔細にはを玩味すれば鹽辛きものあり甘すぎたるものあり勿論無味淡泊なる事輕やかに然たるものに比すれば寧ろまさらめども鹽辛きは田舎者に適すべく甘すぎたるは下戸連に氣に入るべく決して具眼者料理通の腹を穿つ事能はざるなり

ここで魯庵は、『夏木立』の「考案」が「一夜作り」のものであり、文章表現の巧みさに「一時は眩惑」されても決して「具眼者」を満足させるものではないと述べている。つまり、魯庵は美妙の表現の巧みさは認めながら、その奥にあるべきじつくりと練りあげた「考案」が欠如していることを見抜いたのである。

この指摘に対して、作者美妙は、「不知庵大人の御批評を拜見して御返答まで作つた懺悔文」^(注9)の中で、

小生の文章を一夜づくりだろうと御鑑定なされた御見識には實は一句もありません。卑怯らしい申分ですが、兎角小生の癖として草稿を一度立てたばかりの物を直に鉛筆に掛けることに爲つて居て、自分も時に校正する時、従前の文章を讀返して見て随分悔る事も度々ありますが、さすがにもはや左様なつては多く改めて活版屋に迷惑をかけるに忍びず、つひ其の儘で世の中に出しました。無論これは悪いに違ひありません。(以下略)

と述べている。ここで美妙は魯庵の言い分をほぼ認める発言をしているのである。これには勿論、新参者の批評を寛大に受け入れてや

ろうという美妙の気分も働いているであろうが、一応魯庵の眼識が高く、指摘が的を得たものであったという裏づけにはなろう。

一方、忍月の批評はどうかと言うと、「考案」に関しては全く言及していない。「考案」という文字すら見当たらないのである。

では次に、魯庵の二つめの指摘を見てみよう。ここで魯庵は「篇の長短を以て是非する」のではないが、「夏木だちの諸篇の如き憚りあれども皆小説とは申しがたし(中略)大人が著はスケツチなり以て小説を編むの材料たるべし」と発言する。そして、「小説の主眼は情致なれどもチトの波瀾も照應もなく又少しの脚色だになければ小説とは云ひがたし」と「趣向」を含めた「脚色」の「實」が欠如し、「唯奇麗だと云う計り」であることが「夏木立」を「スケツチ」に終わらせているのだと述べるのである。

さて、忍月の方であるが、忍月もやはり同様の指摘をしている。その部分を次に引用してみよう。

此「夏木だち」は首尾連絡したる真正の人情小説に非ずして、^{ツシヤレ!}端物小説又た雜記小説とも言ふ可き隨感隨筆なるが故に、予の豫想に對して何となく物足らぬ心持を覺う。(中略)同氏の妙文は此著にも現はれてゐるやうなれど、同氏獨有の情致を寫すに巧緻なる一段は此「夏木だち」には十分現はれをらず

これを見ると、忍月は「何となく物足らぬ心持を覺」える理由を、『夏木立』の諸篇が「隨感隨筆」であつて、「真正の人情小説」ではないところに見出している。そして、『夏木立』は「妙文」ではあるが、「同氏獨有の情致を寫すに巧緻なる一段」は十分に現れて

いないと述べているのである。

〇八頁に實に十バカリ見へるこれ聞苦るしいの素天邊なり

いるのである。これには勿論、新参者の批評を寛大に受け入れてや

いないと述べているのである。

このように表現は異なるが、魯庵、忍月ともに『夏木立』が「小説」とは呼べないものだという発言を行っているのである。

ここで注目すべき第一の項目は、両者ともに、小説に於て「情致」というものを重視していることである。表面的な文章の巧みさよりも「情致」を重んじていた点に関しては、両者に共通するものがあったといえるだろう。

そして、第二の項目は、忍月が読後の「もの足りない」という感想から、その原因を「真正の人情小説」ではないとところに求めているのに対して、魯庵の方は、小説と呼べない理由は何であるか、と作者の側に原因を求めていることである。つまり、忍月は読者の立場、魯庵は作者の立場に立って、この『夏木立』の小説と呼べない所以を追求しているのである。

魯庵は冒頭に「美妙齋主人に奉る」と述べているが、これも作者美妙に向けられた批評であるということを示すものであろう。また忍月も「予は此書の讀者に向ひ一言すべきことあり（中略）讀者此書を以て同氏の全斑を評する勿れ」と、読者を意識した発言をしているが、ここにも読者を念頭において批評している忍月の姿勢が現れていると言えよう。^(注14)

では紅葉の場合、どのような立場から『夏木立』を批評しているのだろうか。紅葉は表紙から目次どおり頁を追って気付いた点を述べていくのであるが、その批評方法は至って直観的である。例えば、

○「壓びあす」の言語生ぬるい處多し

あるが、「同氏獨有の情致を寫すに巧絶なる一段」は十分に現れて

○八頁に實に十バカリ見へるこれ聞苦るしいの素天邊なり

○「意地のわるい夜ハ……」の一章は面白く感じました
等、「生ぬるい」「聞苦るしい」「面白く」と字面から主観的に感じとったそのままを記しているのである。また、表紙から終末へと読者が本を繙くように順々に批評を進めている点、標題を「夏木立の評判」としている点等、読者の側からの批評であるといえる。しかし、忍月が感想をもたらず原因にまで言及しているのに対して、紅葉の場合は、あくまで表現技術に関する感想、意見を示しているにすぎないのである。そこには紅葉の小説家としての技術に対する自負も窺えるが、批評としてはかなり客観性を欠いたものであると言わねばならないだろう。

七

次に魯庵は表現面、特に文体について言及する。それを見ると、「大人が一流の新躰を創造せられし其才思にはおのれ常に敬服す」と言い、「大人の文は一流獨得にして一種の妙味紙上躍然たり」と述べている。しかしながら、「下流の言語」を用いるために「大に風韻に乏しく情なくも是が爲めに大人の作を退くるものあり」とか、「大人が比喩造語はあまりに高妙にしておのれが如きおろか者には却て高妙」とも思えず、「斬新奇拔」にすぎず「文躰を損ずるもの」であるとか、「大人が文はチト考へ過ぎたと申すより外なし大人はあまり頓智頓興に富み殊に是を濫用せられし」とかと言った否定的

意見が大半を占めているのである。

というのは、魯庵は実際の談話、演説を写したような「真正なる言文一致」では「靈活なる文字」は作れない、「富艶と豪宕を兼ね滑稽と曲麗とを併寫すべきもの」は「我國固有の文躰」である「雅俗折衷躰」以外にはない、という基準から美妙の言文一致体を批評しているからである。

この文体に対する考え方は、雅文体から徐々に言文一致体へと変化していった過渡期の文化人の認識を示すものと言えよう。しかしながら、描かれている内容と文体の釣合を考へるべきだという指摘には、過渡期云々に拘わらない鋭いものが窺えるようである。

視点を交えて、文体という面から「山田美妙大人の小説」を見てみると、魯庵の理想とする「雅俗折衷躰」が具現化されているのに気付く。換言するなら、魯庵は自らの文体に対する考え方を批評文の中で実践してみせているのである。

魯庵がこのように自分なりの文体論を展開しているのに対して、忍月は、表現面についても徹底的に「夏木立」の作品に密着した批評を行っている。記述に沿って表現に関するところを追っていくと、まず、「美妙齋氏の文章は一種出色自ら一家を組成すると謂つ可し」と述べ、「武藏野」の中から特に優れた部分(注)を引用している。次に美妙の「惡癖」として「必要もないのに同じことを二度繰り返すこと」(注)「主客を轉用さるる」ことを挙げて、その箇所を示している。文体については、「だ体」になっているところを「です体」に直した方がよいという言及が行っているが、魯庵が述べたような言文一

致体に感ずる意見は見当たらないのである。

紅葉の場合、「玉屋の塵」の「趣向」に関する指摘を除くと、批評のほぼ全部が、先に示したような表現上の技術に関する感想、意見の列挙である。その一々を取りあげる必要も認められないので、ここでは言文一致についての指摘だけを抜き出すことにしたい。

紅葉は、「籠の俘囚」中の表現を取りあげ、美妙の言文一致体の欠点だと思われる点を次のように述べている。

二十三頁の草紙地に《今は塙忍袋の隠れ家から突出して……》

又《今ハ冷めて青瓜アヲを伴アヲにつれさうになり》などの句は如何にもおかしく聞えて今まで看客がこの女を可哀さうにとおもった念もこれのために退散してしまふ蕎麥をくって田螺をたべるやうなもの。美妙氏の言文一致にハ時々この瑕があるやにぞんずる

これは、「斬新奇抜」にすぎない「文躰を損ずるもの」であるという魯庵の指摘と同様の内容を持っている。唯、注意すべきは、魯庵が表現上の欠点から作者美妙の文体に対する姿勢をも考察しているのに対して、紅葉の方は、「看客がこの女を可哀さうにとおもった念」を「退散させてしまふ」原因を言文一致の表現方法に求めてはいるが、決して作者側の姿勢にまで言及していないことである。つまり、紅葉の場合、言文一致に対する発言も、他の指摘同様、表現技術という視点から行われているのである。

このように、表現面に関する批評にも各々の特徴がよく出ている。忍月が文章の優れた点、「惡癖」と呼べる点を挙げるなど本文

に即した部分的、技術的な指摘を行い、紅葉が美妙の言文一致体の

では忍月はどうかであるか。忍月もやはり批評の末部で、「籠の俘囚」

文体については「たぐ」はか、……した方がよいという言及は行っているが、魯庵が述べたような言文一

に即した部分的、技術的な指摘を行い、紅葉が美妙の言文一致体の欠点をとりあげながら表現上の問題にとどめたのと比較して、魯庵の方は批評文そのものに「雅俗折衷」を用いて自らの文体に対する考え方を示し、美妙の言文一致に疑問を呈したのである。ここにも、批評を通して何を正し何を求めるのかという意識の違いが示されているようである。

八

次に美妙の人物造型を三者がどのように捉えているか、について考えてみたい。

魯庵は批評の終末に近い部分で、「大人の人物はいづれも全様にして new names, but no new qualities. の嘆なき能はず」と述べ、取材する社会は「書生社會」のみではなく、とりあげる人物も「上は錦團玉障の中に垂籠りて古人を友とし給ふやん事なき方々より下は軒端もる月を燈にマツチの箱を張る賤婦に至る」幅広いものでなければならぬと指摘する。そして、春水を例に引き、

おのれ常に春水派の小本を讀む毎に其人情を穿つ細かきを愛すると今時に卷中の人物盡く全一なるを怨む(中略) 毎篇の人物を新奇にせざりしは春水が爲めに惜まざるを得ず

と述べ、美妙に対して「春水が轍を踏」むなど忠告している。つまり魯庵は、もっと広い範圍から小説(人物)を取材し、新鮮な個性ある人物を描かねばならないと言っているのである。

る。忍月が文章の優れた点、「惡癖」と呼べる点を挙げるなど本文

では忍月はどうかであるか。忍月もやはり批評の末部で、「籠の俘囚」の「馬あじにあ」や「仇を恩」の女の子の人物造型について言及している。が、魯庵と違って作者の創作姿勢を直接追求してはいない。第一回の馬あじにあの言葉は餘り断り上手には非ずや。あれ程甘く手柔かに滔々と言ひ廻すのは、爲永流の藝者か何かの言葉の様で、生娘の眞状を穿ち得たるものとは言ふ可からず。

というように、表現面から人物造型上の問題を捉えているのである。紅葉も忍月同様、「籠の俘囚」の「親子の一世のわかれ」の段の「親父」のことが逼迫した場面の父親の造型として不適当なものであること、「花の茨の花」で「牧羊兒」が無事家に帰り着いて表の風景を見ながら言う「獨語」が「ませすぎたる口上にして實地に遠」いものであることなど、表現上の問題点から人物の造型を捉えているのである。

作品の表現上の問題として人物造型を捉える忍月や紅葉と、美妙を含めた当時の小説家の傾向を押さえ、取材する範圍の狭さと人物論とを結びつけて述べる魯庵の間には、対象としている範圍の差、問題意識の違いが現れていると言えるだろう。

九

以上、「夏木立」をめぐる魯庵、忍月の批評を中心に、紅葉の批評も参考にしながら見て来たのであるが、各々の批評はどのように締め括られているだろうか。

紅葉に関しては最後まで、今までに示したような表現上の指摘が
 続くので取りあげるに及ばないが、魯庵、忍月に関しては各々の特
 色が現れているようである。

まず魯庵から見よう。魯庵は、春水の弊を繰り返さず、生き
 た人物を描けと忠告した後で、

大人よ願くはエミルゾラの如きリアリストとなつて「ナ、」
 「ラブ、エピソード」の如き絶好小説を綴れ

と述べ、「リヤリスト」として「小説改良」を進めていくことを期
 待して批評を結んでいるのである。

一方、忍月の方は「或る獨逸の批評家」の

シルレルの文は内より發し、ゲエターの文は外より應ず。故に
 シルレルは思考力想像力に富豊にして、ゲエターは天地萬物己
 れの耳目を経過するものを捕へて以ツテ筆硯の奴隸となすに巧
 みなり。故にシルレルの文は緻密濫雅なり、ゲエターの文は快
 活流暢なり

という文を引き、美妙の文は「シルレルに類するの傾き」があり、
 「外物の刺劇を假らずして、専ら思考力想像力を以つて其文を構造」
 しているようだ、という指摘で『夏木立』評を締め括っている。

こうして両者の末文を見ても、冒頭部分と同様、各々の批評
 意識や方法がよく現れている。魯庵は「エミルゾラ」の名を挙げ、
 「ナ、」「ラブ、エピソード」を引いて、理想とする文学を具体的
 に示し、文学改良の目指すべき方向を明確に打ち出して筆をおいて
 いる。ここには魯庵が求めていた文学——当然彼の文芸意識や批評

の視点、方法とも関わってくるのであるが——が何であるかを知る
 手がかりがある。又、この批評が、文学改良家として新文学を担っ
 ていくべき美妙に対する期待や注文、忠告を多分に含んだものであ
 るということを示唆している。これは魯庵が『夏木立』の問題点
 を論じながら作者の創作姿勢にまで筆を進めていたことを考えあわ
 せれば大いに頷けることであろう。それに対して忍月は、それまで
 本文に即した批評を行っていたにも拘わらず、突如として「或る獨
 逸の批評家」のことは引きあいに出して批評の最後を飾っている
 のである。ここには獨逸の文学理論が自分の批評の背景にあること
 を暗示し、自らの論を強めようとする意図があつたのではないかと
 思われる。が、いずれにせよ、ここに至つて「シルレル」だの「ゲ
 エター」だのを登場させずにはいられなかつたあたりに、忍月の批
 評意識や方法が窺えるようである。

十

以上、『夏木立』をめぐる批評を、冒頭から末尾まで問題点をと
 りあげながら、考察して来たわけであるが、ここでもう一度総括し
 て捉えなおしてみたいと思う。

まず第一に考えなくてはならないのは、他者の批評を誂了した後、
 自らの批評を行ったことがどういふ意味を持つてくるかということ
 である。

紅葉は忍月、魯庵の批評に目を通していたのであるが、彼が行

った批評は殆ど全てが表現面に関する指摘である。これは忍月が美

いる。ここには魯庵が求めていた文学——当然彼の文芸意識や批評

った批評は殆ど全てが表現面に関する指摘である。これは忍月が美妙の文章の長短所や人物造型に対して用いた批評方法と極めて類似している。それに対して、同じく忍月の批評を読了していた魯庵は、紅葉とは全く逆の方法——つまり表現技術を云々するのではなく、創作の主体である作者の姿勢を追求する方法をとったのである。これはどういふことを意味するのであるか。

ここには勿論、先人の方法を踏襲しない魯庵の独自性、創造性があるわけであり、新しい価値を見出そうとする積極的な態度は評価してよいものがあるろう。しかし、それだけではない。魯庵が表現技術に関する添削的な批評方法を全く排除したのは、そこに彼自身の文芸意識があつたためである。

紅葉の批評は先に述べたとおり、表現に対する部分的、羅列的なものなのであるが、魯庵はこの紅葉の批評態度について、後に取りあげた「京人形」評（註）の中で、

天井の隅の蜘蛛の巢を拂ふが如く徒らに字句の末に拘泥し、全豹を執て是を論せず、怪しむべき哉、字句に議すべきなれば完美なる小説と曰つて可なる歟。

と記している。これを見ても魯庵が、「字句」よりも、「全豹」にかかわる文学の本質に触れ得るものを捉えようとしていたことは明らかである。

この魯庵の姿勢は「山田美妙大人の小説」の内容にも反映されている。忍月が読者の側の視点から「夏木立」を批評しているのに対して、魯庵は作品から作者の創作のプロセスへと溯って言及してい

紅葉は忍月、魯庵の批評に目を通していたのであるが、彼が行

るのである。これは忍月の捉えていない「立案」「趣向」「脚色」に関する指摘、「言文一致躰」のあり方についての発言を見ればよく判る。例えば、魯庵は、文壇事情や世間の好尚を含む大きな視野から美妙を位置づけ、「流行」に流される傾向のあることを指摘しているが、そこには核心に触れる鋭さ、斬新さがあるといえる。つまり、魯庵は細かな表現技巧に関する指摘を行うよりも、作者の根本姿勢に言及することに批評の意味を見出していたのである。そして、こうした彼の文芸意識が、先人の批評方法を否定し、作者側に追求の手を伸ばす批評を生み出したのである。これは単に、美妙への私信として書かれたという事情に拠るものではない。その後の批評をみても明らかだが、創作姿勢に対する鋭い追求は、彼の強固な文芸意識に支えられたものである。

また、忍月の批評が、終末部分で暗示されていたように独逸の文学理論をもさしとしているのに対して、魯庵はもっと自由に、自らの古典や外国小説に関する知識をふんだんに盛りこんで視点や基準を設けているのである。表現の方法にしても、生真面目な忍月に比べて、魯庵の方は、紅葉に「縦横にまわしたる文章の面白さ」と言わしめる柔軟さ、軽妙さをもつていたと思われる。

こうして見ていくと、魯庵の文壇へのデビューを飾った「山田美妙大人の小説」は、美妙の姿勢を見抜く眼力に於ても表現面に於ても、忍月と互角に張り合っているだけの力を持っていたといつて過言ではあるまい。それは、この一篇の批評で「女學雜誌」の批評壇に迎え入れられたことから証明されよう。また、「字句」より

も「脚色」「情綴」に重きをおいている点など、その後展開される批評の地盤が、既に築かれているようにも思えるのである。即ち、「山田美妙大人の小説」は、確固たる文芸意識に支えられた、批評家としての出発点にふさわしいものであった。それは魯庵が近い将来、批評壇に忍月と並ぶ地位を得ることを十分に予測させるものであったのである。

注記

- 1 「樟蔭国文学」第17号（昭54・10）所載。
- 2 署名「S. S. S.」
- 3 明治二十年代前半に於けるものだけでも、「もしや草紙」「色懺悔」「掘出し物」「むら竹」「風流佛」「殘菊」等、少なくとも二十七篇ある。
- 4 「社幹美妙齋著夏木立」「社幹美妙齋著夏木立の評判（つゞき）」「社幹美妙齋著夏木立の評判（続き）」と題して「我樂多文庫」第7・8・9号（明21・9／10・9／25・10／10）に連載された。署名はいずれも「社幹 紅葉山人」
- 5 署名「忍月居士」
- 6 「女學雜誌」第132・134号（明12・10／20・11／3）に分けて発表された。署名は（其一）では「不知菴主人」、（其二）では「不知庵主人」となっている。
- 7 「予が文學者となりし徑路」（「新潮」第11巻第6号 明42・12）の中の「美妙齋の私信女學雜誌に公にさる」の項に詳るに至る大きな要素であったことをつけ加えておきたい。
- 8 忍月が「妹と脊鏡を讀む」（「女學雜誌」第47・48・49号 明20・1）の中で、逍遙の文学活動を「小説改良」として捉える発言をしていることから考えても、忍月が「改良」に対して無関心であったとは言えないであろう。
- 9 「女學雜誌」第135・136号（明21・11）署名「美妙齋主人」
- 10 この忍月の指摘については、紅葉も同様の発言をしている。
- 11 紅葉は第二回目の批評の冒頭で、「玉屋の塵」の「趣向」が、「猿蟹合戦にして極高尚に申せば Fade（寓意小説）」であり、「夏木立の縁を増すにたらず無くとも美妙が筆才をしめすに害なし」と書いている。これは魯庵が、「玉屋の塵」や「仇を恩」について、「趣向も淺々しく大人が天稟を以て比すれば牛刀を以て鶏をさく心地す」と述べたのと重なる指摘である。「夏木立」評に於て、魯庵と紅葉の指摘が一致したのはこの一点のみである。
- 12 「紅葉山人の『風流京人形』」（「女學雜誌」第137号 明22・4）署名「不知菴主人」
- 13 魯庵はこの「山田美妙大人の小説」によって認められ、忍月が去った後の「女學雜誌」の批評欄を担当するようになる。批評家として一応の地位にいた忍月の跡を補うための抜擢であったことから考えても、魯庵の「夏木立」評はかなりレベルの高いものであったと言えようである。ついながら、魯庵が「女學雜誌」に批評の場を得たのは、忍月と並び称され

・12)の中の「美妙齋の私信女學雜誌に公にさる」の項に詳

庵が「女學雜誌」に批評の場を得たのは、忍月と並び称され

るに至る大きな要素であったことをつけ加えておきたい。

14 魯庵の批評が作者の立場にたったものであるのは、これが美

妙苑の私信であったことから考えて当然であるし、忍月の批

評が読者を意識したものであるのも雑誌の文芸批評として尤

もなことに言わねばならない。が、魯庵に関して言えば、

「夏木立」評以後、雑誌に発表した文芸批評に於ても、作者

の創作姿勢への追求を行っており、私信であると否とにかか

らない魯庵の批評態度の基本を示していると思われる。

△大阪教育大学大学院生▽

森田代「異本」